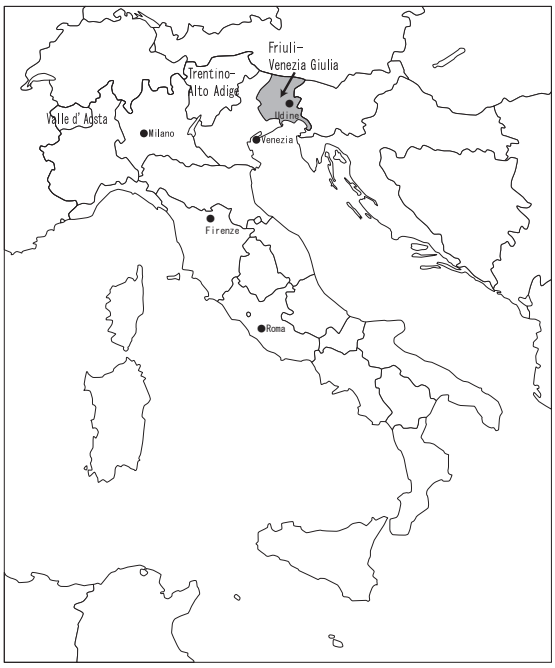
フリウリ語母語教育の現状と課題

Lingua friulana : attuali metodi di insegnamento e problematiche relative

山　田　敏　弘
YAMADA Toshihiro
lingua@gifu-u.ac.jp

1．はじめに

水の都ヴェネツィア (Venezia) から北東へ120キロほどのところに，イタリア語とは「異なる」言語を話すフリウリ (Friuli) 地方がある。州としてはフリウリ=ヴェネツィアジューリア (Friuli-Venezia Giulia)，つまり，フリウリ地方と，オーストリアから1918年割譲されたトリエステ (Trieste) を含むヴェネツィアジューリア地方 (本来，イストリア半島を含んでいたがイストリア半島は今日ではスロベニアならびにクロアチア領内となっている) の 2 地方からなるイタリア最北東部の州で話されているのが，今回取り上げるフリウリ語である。



地図１　フリウリ=ヴェネツィアジューリア州と他の特別自治州

フリウリ=ヴェネツィアジューリア州は，イタリアでも言語的に最も特徴的な州である。州中央部では，北部山岳部を含め平野中央部と南部まで，フリウリ語 (*it.*[1] friulano, *fu.* furlan) が公的に用いられており，主としてこのような言語的理由により，トレンティーノ=アルトアディジェ州 (Trentino-Alto Adige：公用語：イタリア語・ドイツ語)，ヴァッレ=ダオスタ州 (Valle d'Aosta：公用語：イタリア語・フランス語) とならんで，イタリア共和国における特別自治州 (regione autonoma) に位置付けられている。また，このフリウリ=ヴェネツィアジューリア州は，イタリアで唯一四言語による多言語併用 (plurilinguismo) が見られる地域である。州全体でイタリア共和国の公用語であるイタリア語が解されるほか，東部のヴェネト州 (Veneto：州都Venezia) に隣接する地方と，スロベニア国境のトリエステ (Trieste) など西南部地域では，方言を含めイタリア語を話す。他に，オーストリアと国境を接する地域にドイツ語の村と，スロベニアと接する地域にスロベニア語の村がある。

本考察においては，このような言語的に複雑なフリウリ=ヴェネツィアジューリア州におけるフリウリ語の母語教育の現状を，2007年 3 月および2008年 4 月から 5 月にかけておこなった調査をもとに報告し，課題を考察する。

---

1 言語名を含む固有名詞については，特に注記しない場合にはイタリア語を示す。注記としては，de. ドイツ語，en. 英語，fu. フリウリ語，la. ラディン語，ru. ロマンシュ語を用いる。

２．考察の前提～フリウリ語の位置付け

考察の前提として，フリウリ語の位置付けを確認しておく。詳細は，長期にわたる不断の研究成果である山本真司 (2005) に述べられているが，ここでは，本考察の前提として簡単に概略を整理しておく。

２.１　フリウリ語の言語的位置付けと歴史

フリウリ語は，スイスのグラウビュンデン州 (*de.* Graubünden) のロマンシュ語 (*ru.* rumanstch)，イタリアのトレンティーノ=アルトアディジェ州のドロミティ=ラディン語 (*la.* ladin de la dolomites) とともに，通常，レトロマンス語 (*en.* rheto-romance) の１言語と分類される (Florentin Lutz 1982, Rebecca Posner 1996 *inter alia*)。このレトロマンス語は，ローマに征服されるまでアルプス山中を主たる住処としたレト族 (en. Rhaetic) の言語的特徴をローマ化された後も引き継ぎ，俗ラテン語を経て言語として確立したと考えられている。つまり，イベリア人の言語を基層に発達したスペイン語やガリア人の言語の影響を受けて発達したフランス語と同じく，ロマンス系の１言語なのである。

レトロマンス語３方言の交流は，近年，レトロマンス有識者会議 Colloquium Retoromanistich 等の形で定期的におこなわれており，相互理解もある程度可能である (Feliciano Medeot p.c.) が，分布が国境をまたぐことと，イタリア語やドイツ語に地理的にも分断されて存在し歴史的一体感を持つには至ってこなかったことのため，今でも，ひとつの言語としてまとめて取り扱われることは少ない。

フリウリ語の言語としての地位を語る際にもっとも重要な歴史的資料が，1336年から1337年にかけての，「ジェモーナのジャコモ=フォンカシオの覚書 (il quaderno di Giacomo Foncasio da Gemona)」である。断片的に固有名詞を記載する文献を除くともっとも古いフリウリ語の文献で，中世後期のジェモーナでの口語の用法がわかる資料として興味深い (Vicario 2005:98) ものである。ここには，すでに，音価は不詳ながら ç が用いられているなどの，イタリア語にない特徴が見られる。おおよそ，この時代から独特の書記法を有する自立した言語との意識があったと推察される。

なぜ，このようなことが可能となったのか。それには，アクイレイア総司教を君主として1077年に成立したフリウリ国の存在があったことは間違いないだろう。1420年にヴェネツィア共和国に併合されるまでの300年を超える間，独立国であったことが，「一度確立したフリウリ語としての基本的アイデンティティは変わらず，現代にいたる (山本2005:296)」のである。今回の調査においてもやはり独立した言語の根拠として出されることもあった。ヴェネツィア共和国による併合以来，支配層の言語はイタリアの一部となって変わろうとも，ファシズムの時代に弾圧されようとも，民衆に語り継がれてきたこのロマンス系の一言語は保持され続けたのである。

一方，フリウリ地方で現代のフリウリ語について話を聞くとき，時代として起点となるのは1976年の北部山岳地帯を中心として起こった地震である。フリウリ地方の多くの地域が壊滅的な打撃を受けたこの地震によって，人々が自らのアイデンティティを再確認し目の前で崩壊しつつある自らの言語に気づくことになったとは，今回の調査で多くの人の口から聞かれたことである。安価に情報を伝えられるFMラジオRadio Onde Furlaneの基礎になった放送局ができたのもこの地震の後である (同局Carli Pup p.c.)。しかし，このような機運とは別に，フリウリ語が公に使われるようになってきたのは，1992年11月5日に採択された「地域および少数言語に関する欧州憲章 (The European Charter for Regional or Minority Languages)」による。このようないわば外圧によって，1996年2月27日，地域法 (Regional Law) 第15法「フリウリの言語と文化の保護推進ならびに地域少数言語教育に関する法律 (Norme per la tutela e la promozione della lingua e della cultura friulane e istituzione del servizio per le lingue regionali e minoritarie)」が制定され，有名な1999年12

月15日イタリア共和国第482法 (Law no. 482/99)「歴史的少数言語の保護に関する法律 (Norme in materia in tutela delle minoranze linguistiche storiche)」へと繋がっていく。

以上，フリウリ語の歴史を概観し，通時的な言語性と近年のフリウリ語を取り巻く環境について述べた。

2.2　方言と言語の境界

次に，共時的に見たフリウリ語の言語的特徴について概観しておく。

前節では，フリウリ語がイタリア国内法1999/482における「歴史的少数言語 (minoranze linguistiche storiche)」にあたることに触れた。では，どのような基準で，歴史的少数言語となるのであろうか。また，方言との違いは何であるのか。

1999/482法による保護の対象となる言語は，アルバニア語 (シチリア)，カタロニア語 (サルデニア)，ギリシャ語 (イタリア南部各地)，スロベニア語 (フリウリ=ヴェネツィアジューリア州)，クロアチア語 (イタリア中部)，フランス語 (ヴァッレ=ダオスタ州)，フランコプロヴァンス語 (ヴァッレ=ダオスタ州)，オクシタン語 (ピエモンテ州・カラブリア州)，ドイツ語 (トレンティーノ=アルトアディジェ州)，サルデニア語 (サルデニア)，レトロマンス語（ラディン語 (トレンティーノ=アルトアディジェ州)・フリウリ語 (フリウリ=ヴェネツィアジューリア州）の12言語である。

言語学的に，アルバニア語，カタロニア語，ギリシャ語，スロベニア語，クロアチア語，ドイツ語は，系統がイタリア語と異なる。一方，カタロニア語，フランス語，フランコ=プロヴァンス語，オクシタン語，サルデニア語，レトロマンス (ラディン語・フリウリ語) 語は，俗ラテン語から派生したロマンス語である点で，よりイタリア語に近いが，サルデニア語を除き 6 言語はすべて，複数形でラテン語複数対格に由来する -s を用いる西ロマンス語であり，複数主格に由来する複数形を持つ東ロマンス語のイタリア語と異なる (Penny2000:24によれば，サルデニア語は，東西ロマンス語とともに分かれひとつの系統を成している)。また，特に，レトロマンス語の母音 a の前の c の音が口蓋化する現象は，フランス語と共通した特徴であり，イタリア語とは一線を画す。違いは相対的なものであるが，主要な言語特徴からは，フリウリ語はイタリア語とは（遠い親戚であることは事実であるが）系統的に異なると考えられている。

一方で，有名なバルカン言語連合のような地域的共通性が，系統の違いを超えて見られることもある。フリウリ語では，人称にもよるが，主語に一致する代名詞接辞を繰り返す。たとえば，Jo o ven. とはイタリア語で言えば，Io vengo.であるが，一人称単数の代名詞接辞 o が挿入されている。これは，ヴェネト方言からフィレンツェ方言にまで見られる現象で (Marcato & Ursini 1998:136-137 *et alibi*)，フリウリ語が北イタリア方言の一部の特徴を共有していることも事実である。

もっとも近隣言語との融合が進んでいるのは，語彙である。フリウリ語はドイツ語やスロベニア語からの語彙をも取り入れている (Vicario 2005:71-74) が，やはりもっとも多いのは，イタリア語 (あるいはヴェネト方言) からの語彙の流入である。漢字を中国から大量に受け入れている日本語から見れば，語彙の流入はあくまで表層的な変化であり，言語の骨格を揺るがすような変化ではないと考えられるが，日本語における漢語と比較して和語のような選択肢がほかにない点でも違いがある。

このような状況については，イタリア語からの借用語彙をフリウリ語風に変換する試みも現在なされている。言語学者フランコ=フィンコ Franco Finco (p.c.) は，collegio (会社) を例に挙げ，現在，多くのフリウリ語話者によって用いられているcolegjo（コレーギョ）は，重子音 ll を単子音化して gio（ジョ）をフリウリ語的な口蓋化音 gjo（ギョ）にしただけで，フリウリ語の本来的な変化による語のルールに合っていないと説明する。少し次元が違うが，中国語の「左右」をそのまま受け入れ，日本語の音声リズムのルールを無視して「ひだりみぎ」と読むとしたら，同様のことが言えるだろうか。

しかし，中国語が大量に日本に入ったからといって，日本語が中国語の一変種となったかというとそうではない。文法という枠組みは日本語のままであり，また，音韻的に拗音が増えたなどの変化は漢字伝来によって引き起こされたとはいえ，それでも基本的な音素は（日本語自体の変化によって生じたものがあっても）大きく変化はしていない。同様なことはフリウリ語においても言える。フリウリ語の colegjo の複数形は，イタリア語的な *colegji ではなく colegjos なのである。

言語的には，近隣の方言，特に隣接する有力なヴェネト Veneto 方言との共通点を有するフリウリ語が言語として認知される理由は，ほかにどのようなものが考えられるであろうか。Vicario (2005:119) は，「言語としての地位 (status) は，内在する言語的特徴 (音韻，文法，語彙) の分析を必ず経なければならないが，それだけで十分ではない (lo status di lingua passa necessariamente attraverso l'analisi delle sue caratteristiche linguistiche interne (fonologia, morfosintassi e lessico), ma ciò non è in ogni caso sufficiente)」と述べる。加えて，「住民と政治家によって認められること (è riconosciuto dunque lo status di lingua, non solo da parte dei linguisiti ma anche dall'insieme della popolazione e dai politici : *ibid.*:120)」を，フリウリ語の場合には言語として認められる条件と考えている。先に述べたフリウリ国時代に確立されたアイデンティティが，今日でもフリウリ語の基礎となっているすることは事実である。これに加え，Vicario (p.c.) は，この時代に成立し途絶えることなく書きことばとして受け継がれてきたフリウリ語文学の存在という通時的蓄積による要素を挙げる。つまりは，言語文化こそが言語たる証であるということである。

どのような基準を採るかによって，言語か方言かの判断は変わりうる。特徴の差は連続的なものであり，相対的な大きさによって測ることは常に恣意性が入り込む余地を残す。

このような議論の余地を残しながら，フリウリ語は，既成事実としての一言語の地位を占めている。これを前提に，次節では，フリウリ語に関し，どのような取り組みがおこなわれているかを概観する。

３．フリウリ語教育に関する状況整備

少数言語の保護が法律に謳われたからといって，すぐに人々がフリウリ語を使えるようになるわけではない。現在，児童の母語は多くイタリア語であり，たとえ祖父母がフリウリ語話者であったとしても，児童が教育無しにフリウリ語を話せるという状況にはないのが地域的な実情である。またウディネ駅周辺など地域の中心部で聞かれる言語はやはりほとんどがイタリア語であり，駅地下の落書きも探した限りフリウリ語によるものは見あたらなかった。つまり，若者たちもフリウリ語を使用している状況にはないのである。これは，日本各地に見られる方言の世代間断絶と類似した状況であると考えてよい。

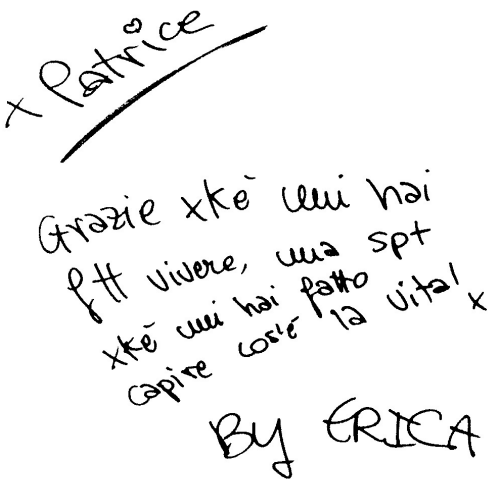


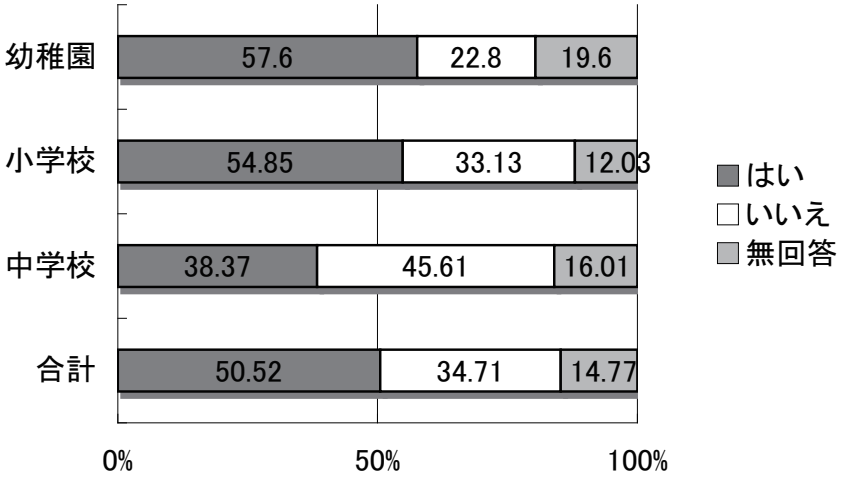
写真１　ウディネ駅地下の落書き（per の代わりに×，che の代わりに ke が用いられている）

このような状況において，どのようにフリウリ語の教育推進の施策が打ち出されているのか。ここでは，現在の状況に関し，学習者と教師という観点から見てみたい。

３.１　入学時の言語選択

フリウリ地方では，就学時に児童本人を含めた家庭が，どの言語によって教育を受けたいか選択する制度がある。調査年は示されていないが，Franco Sguerzi (2006) に挙がっているle opzioni delle

famiglie（家族の選択）というデータによると，フリウリ語による教育を選択する割合は次のようになっている。



グラフ１　教育を受ける言語選択においてフリウリ語を選択した割合

グラフ１からは，幼稚園と小学校で約半数がフリウリ語教育を受ける希望を出しているが，中学校では３分の１程度まで減少していることが読み取れる。

地域的な差も見逃せない。データは省略するが，州都ウディネでは，全年齢の平均で50％を超えていて比較的高い率でフリウリ語による教育を希望しているのに対し，ヴェネツィアとの間にあるポルデノーネ（Pordenone）では，３分の１程度しか「はい」と答えていないなどの差が見られる。

時間軸で見てみると，この2006年以前のデータ（同時に挙がっている教師関係のデータが2002年とあることから同様の年度と考えられる）では，実際の人数が，幼稚園6,879，小学校15,971，中学校6,628となっているが，この数字は，2008年の最新データでも大きく変わらない。2007/08年度では，幼稚園8,007，小学校16,871，中学校5,173であり，2008/09の申し込み段階での途中集計では，幼稚園7,629，小学校16,131，中学校5,777と，人数としては，小学校で減少している一方，中学校ではやや増加傾向が見られる。ただし，割合で見た場合，最新の2008年3月14日フリウリラジオ放送局Radio Onde Furlaneのニュースによると，小学校で60％と高い割合が見られたとの情報もあり，少子化の波の中，微増とも言える状況である。

３.２　学校教育におけるフリウリ語の使用

フリウリ語が実際どのように教育現場で教えられているか。児童生徒の親族以外による教育現場への参観はたやすく実現するものではない。2008年春は，あと一歩でウディネ近郊の町ファエディスFaedisの小学校への参観が許可されるところまでこぎ着けたが，学校行事の都合でキャンセルされてしまい実現しなかった。2ヶ月の滞在に組み込むことは渡航前の交渉をよほど綿密におこなっておかないと難しい。代わりに，2007年３月に訪問したUdineから私鉄で西へ数十分行ったチヴィダーレCividaleという町の私立学校サンタアンジェラメリチ小学校Scuola Santa Angela Mericiでのフリウリ語授業の様子を１例として報告する。

当該校を見つけ出したのは，イタリア文部省の少数言語推進プロジェクトの選定校に挙がっていたことによるものである。ホームページからメールを出し続けてもなかなか返事がもらえず，ローマの知人を介してコンタクトを取りようやく訪問が実現した。

この小学校では，授業すべてがフリウリ語でおこなわれているわけではなく，年間の40時間程度がフリウリ語による授業に当てられている。フリウリ語を教えられる唯一のリンダ・ダンドレアLinda

D'Andrea教諭も，フリウリ語の授業だけをおこなっているわけではなく，ふだんはイタリア語を教えている教師であり，年間限られた授業時間のみをフリウリ語教育に当てている。

訪問時は，フリウリ地方に伝わるズビルフ Sbilf という小人の伝説をフリウリ語とイタリア語で教えるという５年生の授業を参観した。言語は，フリウリ語のみを使用するというわけではなく，常にイタリア語との併用である。それは，フリウリ語を家庭でも日常的に使用している児童がクラス14名中２名であり，フリウリ語をあまり理解できない児童も含まれていたためであることと，そもそもフリウリ語だけを教えるという方針ではなく，イタリア語との二言語併用（実際には，より弱いフリウリ語理解教育）が意図されているためと理解された。

写真２　Scuola Santa Angela Merici での授業の様子
（児童の写真は許可されなかった）

この学校は，演劇に力を入れており，クリスマスに町でおこなわれる演劇祭にフリウリ語劇を上演することを熱心におこなっているとのことであった。リンダ・ダンドレア教諭がシナリオをフリウリ語で作成し，子どもたちもそれを理解し上演する。ちょうど，日本の地方でおこなわれている方言劇と同様の位置付けであるとの印象が強く持たれた。

このことは裏返して言えば，特別な場面の言語としてフリウリ語を用いることを推奨するもので，日常言語としてフリウリ語がイタリア語に取って代わることはまったく意図されていないということでもある。先に挙げた1999/482法も，少数言語保護を謳いながらも，第１条に「共和国の公用語はイタリア語である」と明記されており，この範囲でのフリウリ語教育がおこなわれているのであって，急進的な（言語的）独立は社会的にも教育的にも求められていないことがわかる。

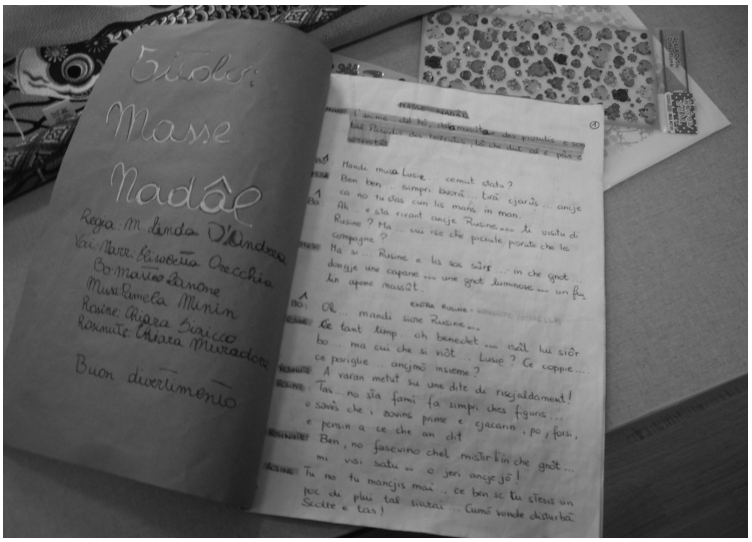


写真３　Scuola Santa Angela Merici のクリスマス演劇会シナリオ

一方で，左の児童のノートからもわかるように，フリウリ語で話すだけではなく書くというレベルまで，小学校で高められていることにも注目しなければならない。日本の学校で方言劇がおこなわれシナリオが方言で記されているとしても，音声的に並べただけになりかねないが，この台本は，綴りを間違えつつも訂正し，その正書法をも学ぼうとする意図が見られる。この点は大きく異なる。

児童の考え方は，まだ劇を単純に楽しんでいるだけという様子だけしか掴めなかったが，親の補助に頼る部分の大きい私立学校は，存続するために親の意向が反映しやすいとのことも聞いた（事実，児童の学習場面を写真撮影することは，「学校の意向」として許可されなかった）。であれば，親の理解もあってのフリウリ語教育なのであろう。十分ではない時間数も，逆に言えば，この程度であれば日本でいうところの総合学習的に許容される範囲なのかもしれない。この点は，別稿にて述べるスイ

スのロマンシュ語の状況とは大きく異なるところである。

また，教師からは，正書法の整備はなされているが，自分の出身の地域とはcjの発音ひとつ取っても，先生は「キャ」と発音し，児童は「チャ」と発音するように，バリエーションが認められるため，指導に困惑する場面もあるとの話を聞いた。地域的には，「キャ」とも「チャ」とも言えない中間的な音も存在し，フリウリ地方の中で最も違いが大きいこの口蓋化音の扱いも，現場では標準形を求めずにはいられないが，標準形を定めることで逆に自分たちのことばから離れていく懸念も耳にした。このような疑問に答えた「標準フリウリ語」を策定していく活動については後述する。

3.3　教師養成と現職教師教育

学校での教育とともに重要なのが教師養成ならびに現職教師教育である。2008年現在，イタリア語を教える教師の免許状，日本でいえば国語の免許に相当するものは存在するが，フリウリ語教育に関する免許状は存在しないとのことである。3年間の大学課程ではなく，その上の2年間の専門課程において，400時間超の時間を修了した者に与えられる認定証は，公的な効力をもつものと見なされていない。

これから教員になろうとしている者にフリウリ語習得の課程を義務づけることはさほど困難ではないとしても，現在教員をしている教師に対しフリウリ語の教育能力の向上を推奨していくことはさらなる困難さを有している。イタリアでは，日本以上に教師の自立性が認められており，公立小学校であっても教師が自ら考えた授業をおこなっていくのがふつうである。このようなよく言えば学校教師の自立性は，同時に，悪く言えば授業内容の不透明性であり，教育の不統一・不均衡をもたらす（フリウリ州自治政府 (Regione Autonoma Friuli Venezia Giulia) 言語窓口 (sportello linguistico) 担当Federica Angeli ・ Cinzia Petris p.c.)。また，先に述べた，今後，言語政策の中心となるべきARLeFのMassimo Ducaも同じ見解であった。日本のように，よくも悪くも一律の教科書によって一定の水準の元に公教育がおこなわれているのとは異なり，役所レベルでは現状の概要が掴めない。

州政府でつかめているフリウリ語教育またはフリウリ語による教育をおこなっている教師の人数は，2007-08年度で992人，08年度はさらに増えて1197人になる予定であるという (Dati Insegnamento della Lingua Friulana, Regione Friuli Venezia Giulia 12.3.08)。この，フリウリ語教育の特徴としては，フリウリ語教育のみならず，フリウリ語を使った教育を合わせて統計化している点が挙げられる。いずれにしても，増える傾向にある点がうかがわれる。

2008年4月からは，フリウリ語地域振興局 (ARLeF : *fu.* Agjenzie Regjonâl pe Lenghe Furlane) とウディネ大学との共催で，フリウリ語教授法講座が開催され始めた。週2回開講で，時間は，火曜日が午後4時半から6時まで，木曜日が4時半から7時半までの2コマである。授業科目と時間数は次のようである。

1年

フリウリ語言語学	30時間
フリウリ文学	20時間
フリウリ語関係学校法	10時間
地理	20時間
歴史	20時間
フリウリ地方の人類学と社会学	20時間
フリウリ語教育法	20時間
他言語使用の神経言語学および心理言語学	20時間
比較言語学	10時間

フリウリ語の歴史		20時間
フリウリ地方の民族誌と文化伝承		20時間
言語習得		10時間
フリウリ語作文ラボ		20時間
語学教育ラボ		20時間
数学・科学ラボ		30時間
選択科目：幼稚園・小学校	音楽・劇場	20時間
選択科目：中学・高校	地理・歴史	20時間
合計		310時間

２年

フリウリ文学		20時間
他言語教育学		20時間
コミュニケーション・メディアラボ		20時間
選択科目：幼稚園・小学校	造形美術	20時間
選択科目：中学・高校	比較文学	20時間
教育実習		75時間
修士論文		40時間
合計		195時間

この授業内容を見ると，教育法があまり多くないことがまず注意を引く。日本で同じようなコースを設けようとすれば，教授法が半分とはいかないまでも，割合としては多くなる。岐阜大学教育学部のカリキュラムでは，小学校の教員免許に必要な単位として国語教育法が必須であるのに対し，教科内容を教える国語は選択となっている。新しく始まったフリウリ語教育は，EUの基準に依拠した構成であるというから，日本のような，言語内容を基礎に置かないまま教育法を必須とするやりかたとは，異なる位置付けがなされていると考えてよいであろう。

参加者は，幼稚園が12名（男性４名，女性８名），小学校が20名（男性７名，女性13名），中学・高校が17名（男性16名，女性１名）となっている。ほとんどが現職教員であるが，基本的に勤務時間が午前中であるイタリアの小中学校の教員には，夕方４時15分開始の講座に通うのは十分である。大学生も数名含まれているほか，すでに年金生活に入った人で今後学校でのボランティアを希望する元教員の方１名が含まれている。かかる費用としては，登録料が14.62ユーロで，１年目の授業料が150ユーロ，２年目が100ユーロである。日本円で言えば，１年目の310時間で25,000円ほどと高くない。なんと１時間80円ほどである。これも，州政府からの財政援助が大きな要因である。修了すれば修士の称号が授与される。

このコースについては，まだ今年度始まったばかりであり，その成果を問うことはおろか，現状について述べることもまだ難しい。追跡調査をおこないいずれ結果報告をしたい。

さて，すぐ上でも述べたが，教育に限らずフリウリ語の環境整備には，資金的な裏付けがある。しかし，この資金的整備はようやく始まったばかりであり，またその額も十分ではないという声がよく聞かれる。2007年度に定められた新しい州法 (Legge Regionale 3/2007, art.7)「歴史的言語的少数派の言語文化教育活動の財政措置に関する告知 Bando per il finanziamento delle attività didattiche d'insegnamento delle lingue e culture delle minoranze linguistiche storiche」第３項によれば，フリウリ語，スロベニア語，ドイツ語の教育は，幼稚園，小学校，中学校において財政的措置が認められ，年50時間以上の実行と対象児それぞれの言語習得評価がなされなければならない

と規定されている。しかしながら，このような財政措置は，年，数百ユーロという規模でしかない。教育に予算がかけられていないのは，洋の東西を問わずのことである。

3.4　フリウリ語教育教材

フリウリ語教育に関し，教材はどの程度整備されているのであろうか。今回は，CIRF（フリウリ言語文化研究センター）副センター長のアレッサンドラ＝ブレッリ博士Dott.ssa Alessandra Burelliから教授いただいた情報をまとめて報告する。

まず，学校でフリウリ語を教えることに直接使える教科書は，現在，１冊刊行されているのみである。“Tin, Gjovanin, L'orsut e i Claps”は，４部構成230ページを超える教科書で，小学校１～３年向けに開発され2004年に発行された。

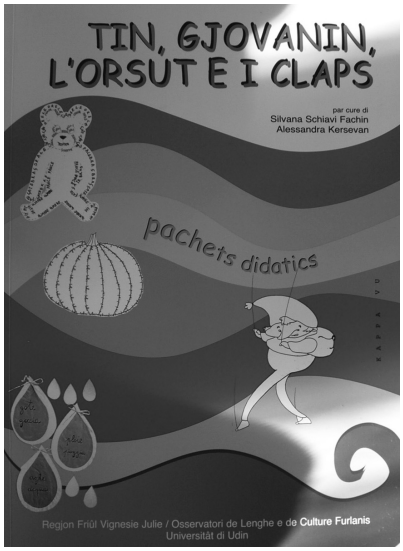


写真４　フリウリ語教科書
"Tin, Gjovanin, L'orsut e i Claps"

第１部は，ウディネ近郊の町ファエディスFaedisの小学校教諭マリーザ＝コメッリMarisa Comelliと，同じくデデアDedeàの小学校教諭アンジェラ＝トゥニツAngela Tunizによる楽しみながら学べる教科書である。子どもたちに人気のあるキャラクターであるねずみのレレRelèが導入をエスコートし，熊をモチーフにした絵を随所に配置して，抵抗無く言語が学べるように配慮してあるのは，イタリア語教科書によく見られる手法である。第２部は，サンダネール・ディニャンSan Danêl e Dignanの幼稚園教諭エンツァ＝プリーノEnza Purinoによるお話や実際の広告などを使った部分である。写真がふんだんに取り入れられておりレアーリアの代用としても使うことができる。第３部は，レナータ＝キャッピーノRenata Chiappino教諭作の物語を使って，フリウリ語特有の綴りであるgj, cj, çとイタリア語と発音の異なるzを学ばせようとするものである。日本であれば，単語をならべておしまいということになりかねないが，ここでは，すべて物語の中で綴りと発音との関係が教えられていることに注意しなければならない。最後の第４部は，リヴィアナ＝ピットLiviana Pitt教諭によるものであるが，いくつかの作業の中で，イタリア語を飛び越えてフリウリ語と英語との比較がなされていることに特徴がある。

全体を通じた特徴もいくつか挙げられる。まず，一切イタリア語はなしでフリウリ語だけで書かれていることである。フリウリ語が読めようが読めまいが，すべての学習に関する指示も説明もイタリア語を使ってはおらず，この教科書で学ぶにあたってはフリウリ語による直接法が取り入れられている。楽しく学べる工夫としては，絵を豊富に用いていることのほか，附属のCD-ROMで，コンピューターを使ってゲーム感覚でフリウリ語の単語を学んでいける工夫もされている。一例を挙げると，熊の絵に身体部位の名前を当てはめていくゲームがあり，間違えると熊と関連のある蜂が出てきて刺されてしまうというものである。子どもたちが自習時間にも楽しく学ぶことができるよう配慮されている。また，歌も豊富に取り入れられている。日本では，音楽の時間が別にあり皆が学ぶがイタリアでは音楽の授業は任意受講であることも多い。ことばの授業の中に歌が取り入れられているのも，この教科書の特徴である。

このほかにも，さまざまな物語教材が，その学年ごとに準備されている。アレッサンドラ＝ケルセヴァンAlessandra Kersevanとジャンカルロ＝フェリシッヒGiancarlo Velliscigによる絵本３部作は，音声テープが準備されており，音と文字から同時にフリウリ語に親しめる教材となっている（写真５）。綴りを学ぶために発達段階に整えられたズギリビッツSghiribiçという教材は，日本では考えられないほど絵と色を用いて全感覚的に綴りを覚えていける工夫がなされている（写真６，７）。

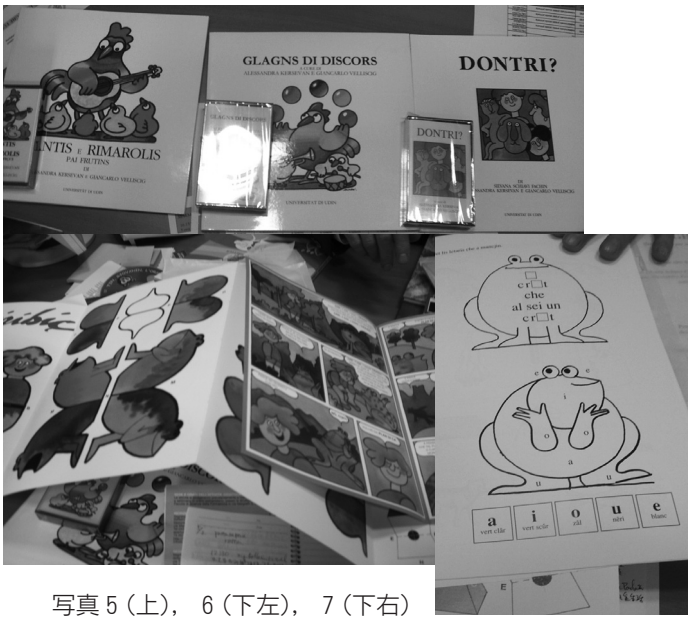


写真５（上），６（下左），７（下右）
フリウリ語教育補助教材

周辺的な教材までこのように印刷物として整備できたのは，実際，EUの少数民族言語保護政策の予算がついたことによる。また，フリウルアドリア国民銀行Banca Popolare FriulAdriaからの資金援助によって刊行された補助教材もあるとのことである。ブレッリ博士は，これらの教材開発が，実際，予算的に厳しい中でおこなわれていると明かし，同じフリウリ＝ヴェネツィアジューリア州にある少数言語の中でも，スロベニア語は，隣国スロベニアに行けば国家言語であり教材開発も国レベルで進んでいくし，ドイツ語に関しても多様な教材がオーストリアやドイツから取り入れることも可能である反面，スロベニア一国と同じ話者人口を抱える同じ少数言語であるフリウリ語は，イタリアの中にしか存在しないため，ここウディネで開発していくしかないと述べた。まだまだ十分とは言えない教材をどのように開発していくかは今後の大きな課題となっている。

３.５　まとめ

フリウリ語教育をとりまく環境について述べてきた。入学時の言語選択という点で明るい未来が開けていそうなフリウリ語教育であるが，その教育時間数といい教材の開発状況といい，まだこれから大きな努力を要する実態が浮かび上がった。その鍵は，教師育成と現職教師教育であると考えたい。前述のフリウリ語教材“Tin, Gjovanin, L’orsut e i Claps”は，ARLeFとウディネ大学とで進められているフリウリ語教授法講座の受講生でもある現職の教員によって作成されたものである。そこには，楽しく刺激的であるとともに，言語理論に則った論理性が見られた。日本の国語教材の中には，漢字学習ばかりに時間を取られ，とてもではないが論理性を育てているとは言えそうにないものも少なくない。業者から購入している教材の質も様々である。子どもたちにもっとも近い現職の先生が言語理論をきちんと学びながら学びやすい教材を開発し，それを共有する体制を作っていくことが，言語教育には重要である。フリウリ語教育に，今後の発展が期待されるような要因がいくつも確認できたことは収穫であった。

それを後押しするのが，地方の行政である。次節では，フリウリ語教育をとりまく行政等の動きを見ていく。

４．行政その他におけるフリウリ語使用促進の動き

フリウリ＝ヴェネツィアジューリア州のフリウリ語担当部局はどこか。実は，調査を最初に開始しようとした際，どこに問い合わせたらよいかまったくわからなかった。探し当てたのは，ウディネ大学のセンターであるCIRF（フリウリ言語文化研究センター：Centro Interdipartimentale di Ricerca sulla Cultura e la Lingua del Friuli “Josef Marchet”, *fu.* Centri Interdipartimentâl di Ricercje su la Culture e la Lenghe dal Friûl “Josef Marchet”），SFF（フリウリ言語協会：Società Filologica Friulana “G.I.Ascoli”, *fu.* Societât Filologjiche Furlane “G.I.Ascoli”），OLF（フリウリ言語文化観察局：Osservatorio della Lingua e della Cultura Friulana, *fu.* Osservatori

de Lenghe e de Cultura Furlanis：現 ARLeF)，そして自治州政府であった。

これらは，互いに連携し合いつつも担当する仕事が異なっている。

4.1　ウディネ大学の活動

ウディネ大学のセンターであるCIRFの活動として，一つは，3.3節で述べた言語教育担当機関ARLeFと共に取り組んでいる教師教育がある。

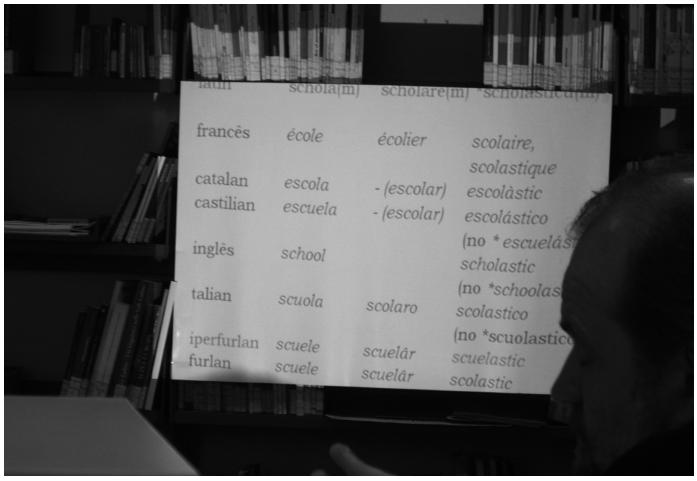


写真 4　CIRF での Iper Furlan 研究会

もうひとつ，標準フリウリ語策定に向けたハイパーフリウリ語（iper-friulano, *fu.* iperfurlan）の研究会もここでおこなわれている。右の写真では，イタリア語でscuola，フリウリ語でscueleという「学校」を意味することばに関し，「学者の」を表すことばを，現在のフリウリ語のscolasticとハイパーフリウリ語として提唱されているscuelasticの比較が話し合われている場面である。語彙一つの選定についても，このような討論がなされている。

また，新しいことばをどのように外国語から導入するかについても試行錯誤が続いている。ハイパーフリウリ語チームの参加者でもあるフランコ＝フィンコは，イタリア語からの借用語のフリウリ語化を推進する上でのジレンマを口にする。たとえば，2.2節に挙げたイタリア語collegioの借用したcolegjoは，フリウリ語形態論からすれば正しくなく，正しくはcoleçであるべきであるとした上で，このような「正しい」フリウリ語の使用を，どのように推奨していくのかが課題であると述べる。行政文書という形での普及が一役買っていくことは疑いのない点であるとはいえ，実際に混乱のない移行が可能であるのか，疑問がないわけではない。

ただ，理論的にふさわしいと考えられる語が必ずしも人々に広く受け入れられやすい語であるとは限らない。また，言語としての純粋さを求めることが，かえってイタリア語からの乖離を招き，結果相互にわかりにくくなることも危惧される。そのことは，国立国語研究所が平成15年から日本語の外来語を置き換えようとして提案した176語からなる提案（平成18年3月）がなかなか受け入れられていないという身近な事象からもわかることである。言論の自由がある社会において，人為的にことばを誘導することは難しいのかもしれない。一方で，学校教育では指針となるべき基準は必要である。このジレンマが常に生きている言語には存在する。

大学が地域の言語に対しておこなえること。これについてはいろいろと議論もあるであろうが，3.3節で見た教師教育の内容といい，このようなCIRFの活動といい，そして，大学教育に携わる教授陣と教育といい，昨今，日本で声高に叫ばれる「現場ですぐ使える教育技術」は，少なくとも目立つほどの割合を占めているとは言い難い。大学で教えられることは大学だけができることに限定されているのである。今回は，フリウリ語という地域言語の教育に関する調査をおこなったのみであるが，教師の自立性が高いと言われるイタリアでは，現場教師が研鑽を積むべき教育技術に大学は重点を置かず，大学は教育への展開を視野に入れながらも，大学にできる学問的追究に専心しているという印象を受けた。大学の学問が机上の空論になる理由にはふたつある。ひとつは，学問自体が現実から遠ざかることであり，もうひとつは，(教員養成・教師教育に関して言えば，) 教育現場の人間の咀嚼能力が落ちることである。どちらをも大学の責任にするということであっては，学問水準の低下を招く

であろう。

このほかに，CIRFにおいては，フリウリ語市民学習講座が開かれている。初級が毎週２クラス。中級のクラスもある。州内の大きな町を巡回するように開催されているこのような語学講座の受講動機はさまざまで，受講者自身へのインタビューによると，フリウリ語話者でない人がこの町に来たことで受講するようになったという人もいれば，フリウリ語話者であるけれどもっと上手にしゃべりたいからと受講する人もいる。受講者数はそれほど多くないという事実は認めなければならないが，それでも毎年開講されていることは注目に値する。

４.２　行政における言語使用とその対策

義務教育段階でのフリウリ語教育とともに注目に社会的に重要なフリウリ語教育が，行政職職員に対するフリウリ語教育である。

日本で，地方公務員に対し日本語教育をおこなうことは考えられない。もし日本語に関し教えることがあっても，それは，字句・表現の訂正や慣例となっている書式を示す程度であり，体系的におこなわれているわけではなく，対処法的であり限定的であるであろう。しかし，フリウリ語を母語として地域で用いるため行政におけるフリウリ語は，まだ教育が必要な段階にある。このことは，未だこの言語の公的使用が認められてから日が浅いことを示しており，公私の区別が現代社会に十分な語彙レベルまで引き上げられていないことを表している。

フリウリ言語協会 (Società Filologica Friulana) のフェリチャーノ＝メデオット Feliciano Medeot (p.c.) は，教育における言語使用に加え行政における言語使用の整備の重要性を強調する。現在，フリウリ＝ヴェネツィアジューリア州においては，前述の1999/482法により，公官庁の表示から文書にいたるまでフリウリ語使用が義務づけられている。しかしながら，職員の多くが完全なフリウリ語の書記法を身につけているかというと，実際難しいようである。この公官庁職員のフリウリ語教育も，公的言語としての地位を確立するために重要なことなのである。

写真６　ウディ市役所の表示
上がイタリア語で下がフリウリ語

正書法は，フリウリ言語文化観察局 *fu.* Osservatori Regjionâl de Lenghe e de Culture Furlanis が『フリウリ語正書法 La grafie uficiâl de lenghe furlane』(2002) を公に定め公表しているが，地名などの固有名詞が問題となることがある。州都ウディネ (Udine) は，フリウリ語で Udin と確定しているが，ウディネから南にバスで１時間ほどの所にある，イタリア語名チェルヴィニャーノ (Cervignano) は，フリウリ語名で公的には Çarvignan となっている。ç は，イタリア語の c に対応する [tʃ] の音を示すのに用いる。当地の古い看板ではＳで始まる表記を用いているものもある。移動中のバス車内から見た限りでは現地の人は，Ｓで始まる表記を看板などにも用いている。このため，『フリウリ語正書法』には，２つの方法が併記されている (資料１の矢印部分)。地名表記に関しては現地表記が併記される例が数割も存在し，その難しさを物語っている。

Cedolins	Cedolins
Celante	Celant
Celante di Castelnovo	Celant
Cella (Forni di Sopra, UD)	Cele (loc. Siela)
Cella (Ovaro, UD)	Cele (loc. Cela)
Cellina, Torrente	Ciline, la (loc. Silina, la)
Cellina, Val	Ciline, Cjanâl da la
Cellino	Celin
Centa (Nimis, UD)	Cente
Centa (Prepotto, UD)	Cente
Ceolini	Ciolins, i (loc. Thiolins)
Cercivento	**Çurçuvint**
Cercivento di sopra	Çurçuvint Disore
Cercivento di sotto	Çurçuvint Disot
Cerdèvol	Cerdevul [-dè-]
Cereschiatis, Sella di	Cjarescjatis, Siele di
Ceresetto	Sarsêt
Cergneu	Cergneu
Cerneglons	Cerneglons
Cervignano del Friuli	**Çarvignan (loc. Sarvignan)** ←
Cesclans	Cjasclans
Cevraia	Cevraie (loc. Sevraia)
Chiadin, Monte	Cjadin, il
Chiaicis	Cjaicis
Chialina	Cjaline (loc. Cjalina)
Chialminis	Cjalminis
Chiampei	Cjampei
Chiampon, Monte	Cjampon, il
Chiampon, Sella	Cjampon, Siele
Chianzutan, Sella	Cjalcutan, Siele (loc. Cjalcutan, Siele)

資料１『フリウリ語正書法 La grafie uficiâl de lenghe furlane』(2002:45)　矢印は山田

写真５　行政におけるフリウリ語使用に関するフリウリ地方３市合同のパンフレット

山本 (2005:302) は，「現在，フリウリ語について行われている政策は，単に既存の伝統・文化を承認し保護するにとどまらず，フリウリ語を社会生活上のあらゆる機能をもった言語に育て上げようとする」「歴史上かつてなかったことを実現しようとする大実験」であると述べる。そのひとつである行政におけるフリウリ語使用は，着実に実績を積みつつある。

なお，写真５として挙げたパンフレットは，イタリア語とフリウリ語が上下逆になっている。これによって，どちらの言語が最初に置かれるか，つまりどちらが優位な言語であるかということを考えず，読みたい言語のほうを読めるようになっている(ここには，1999/482法第１条に謳われる共和国全体の共通語がイタリア語であるということを超えようとする意図を感じないではない)。

４.３　マスメディア

現代社会において，言語が最も効果的に用いられるのは，マスメディアという媒介物によった場合であり，マスメディアによる言語伝播を考えずして言語の普及は考えられない。

先にも述べたとおり，フリウリ語の実情は，やはり若い人がふつうに使う言語ではなくなっていると言わざるを得ない。街角で聞かれることばは，中年以上の人にはフリウリ語も多く用いられている

のを耳にするが，若者はイタリア語が一般的である。街角の落書きにひとつ注目しても，フリウリ語の落書きは，あるとは聞いているがやはり少なく，筆者自身がなんども足を運んだウディネでは，未だ目にしていない。このことは，やはり若者が日常的に用いることばではないと言うことがまだ現実としてあることを意味している。

では，若い人に用いられるような言語にするためには，どうしたらよいのか。その鍵はコミュニケーションの達成感と経済的自立であろう。コミュニケーションのツールとなり他者との意思疎通がフリウリ語でなければ成り立たないという現状は，現在のフリウリ地方には極めて稀であろうし，現在の二言語併用政策の下では今後もありえないであろう。であるとすれば，フリウリ語によるコミュニケーションにプレスティッジ，つまり何らかのお得感なりのメリットを付け加えることが，フリウリ語が若い人のコミュニケーションにおいて用いられる数少ない方法となる。それは，日本の方言が急速な共通語化により没個性となったことへの裏返しとして方言を話すタレントがもてはやされているように，社会的な賞賛なり憧憬なりがフリウリ語使用によって得られるように持っていくことである。

ひとつの試みが，フリウリラジオ放送Radio Onde Furlaneによっておこなわれているフリウリ語歌唱大賞である。毎年，局主催でフリウリ語のオリジナル曲のコンクール (Premi Friûl) がおこなわれ，CD化もされている。コンクール受賞曲を集めたコンピレーションアルバムPremi Friûl 8797には，17曲が収録され，コーラス曲ありポップス，ハードロックありでバラエティに富み，完成度はそこそこ高い。しかし，どうやらこのようなフリウリ語によるCDが市販されることは少なく，ウディネの全国チェーンCDショップであるフェルトリネッリFeltrinelliには置かれておらず，少し趣味的な店でもひとグループを除いて購入することはできないようである。このことは，まだ，一般のフリウリ語音楽に対する認知の低さを物語るものであるが，独自の言語を用いた音楽コンクールが，若者のフリウリ語使用意欲につながっていることはまちがいない。

ラジオに関しては，先に触れたフリウリラジオ放送が，イタリア語をはさみながらであるが一日中フリウリ語による番組を流している。しかし，財政的な負担の大きいテレビに関しては，フリウリ語放送をおこなっているところは，2008年４月の段階ではなかった。ただし，一日数分という限られたものであるが，イタリア国営放送RAIの地方ニュースとして始まることが，予算が付き次第，実現する段階にあるという[2]。次稿に記すスイスのロマンシュ語ニュースも，一日10分程度の放送であるが視聴者からの反応はよいという。テレビ放送の実施がより現代的なニーズに合ったマスメディアでのフリウリ語使用として今後期待される。

５．おわりに

本稿では，フリウリ語に絞って報告をおこない考察をおこなってきた。最後に，本考察では触れられなかった課題となる点について述べておく。

まず，成果として挙げられる点は，現地での充実した取材を通じて，地域言語教育の現状を描き課題をえぐり出せたことである。とかくイタリアでは，現地に行ってみないと何も話が進まない。これは，仕事を担当する部局や人間が事細かに割り当てられていて，その担当者に会うまでが大変な作業であるためである。メールを出してこちらがどれだけ事情をイタリア語で説明しても，知っている人間になら返事が来ても，知らない人間からでは梨の礫になることも少なくない。これはいろいろな事情に寄るだろうし悪意によるものでないことは十分承知しているが，残念ながら，今回，フリウリで

---

2 スイスのイタリア語放送RTSI (Radiotelevisione Svizzera di Lingua Italiana) の2008年６月15日の放送によると，ヴァッレ＝ダオスタ州のRAI地方局は，2007年度103時間のフランス語番組を放送し，144時間のラジオ番組を放送したという。このことを考えるだけも，フランスをバックにもつヴァルダオスタ州や，隣接するオーストリアやスイス，さらにはドイツなどのドイツ語圏がひかえるトレンティーノ=アルトアディジェ州などの状況と異なり，フリウリ=ヴェネツィアジューリア州におけるフリウリ語の地位が，相対的に見てまだまだ低いことがわかる。

もそのようなことは実際によくあった。今回，現地に行けたことによって，ようやく端緒についたとでも言える状況なのである。

そんな中で，国家の中にあって地域に限定された言語を教えることの難しさも痛感した。一方で，フリウリ語の場合，そのような未整備な状況であるからこそ，現代のレベルから新しい言語理論に則った教育の実現がなされていこうとしているダイナミックさを感じることもできた。フリウリ語に関心を持ったきっかけは，すでに四半世紀前になってしまった大学学部生のころに目指していたレトロマンス語研究を懐古的に再開しようとしたことだけではない。現在の奉職先である岐阜大学教育学部における国語，つまり母語話者教育に資する方法論と言語理論に関する知見を得ようとしたことも，動機の大きな部分を占めている。振り返って国語教育を見るに，長い歴史を持つ伝統のよさとともに，歴史が長いからこその無批判な習慣的教育がやはり一部にはあるように見えてならない。特に，歴史的経緯もあるだろうが，昭和30年代以降の言語理論からの乖離が国語教育においては非常に残念な状況を作り出している。フリウリ語では理論的な言語教育がまさに構築されようとしてる現状が垣間見え，これからの国語教育の方向性を考える上で大きな示唆を受けた。

昨年の 3 日間の調査と合わせ，今回の 6 回に及ぶ実地調査を経て，まだ，見えてこないことも少なからずある。その最大の点は，教師教育と現場教育との整合性である。先に記したように現場での教育は，大学からとは別に独自のアプローチでしか実現しなかった。大学に何度か問い合わせ，他の自治政府機関に頼んでみても，データはもらえても実際の現場に案内してもらうどころか紹介してもらうことすらできなかった。不十分であったことは認めなければならないが，この点については，次稿においてスイスでの調査結果から補足していきたい。

【付記】

本考察は，2008年 3 月31日から， 2 ヶ月間の岐阜大学在外研究を得て，イタリア・ヴェネツィア大学[3]を拠点におこなわれた，イタリア北部に存在する異なる母語を持つ地域の母語教育の現状と課題に関する研究の成果の一部である。同時におこなった，イタリア北部トレンティーノ=アルトアディジェ州 Trentino-Alto Adige州におけるラディン Ladin 語に関する調査，ならびに，在外研究に追加しておこなわれた私費によるスイス東部グラウビュンデン Graubünden 州のロマンシュ *ru.* Rumanstch 語に関する調査については，稿を改めて報告する。

【謝辞】

本考察は，Udine 大学 CIRF 所長 Piera Rizzolatti 教授，副所長 Alessandra Burelli 博士，所員 Alessandra Montico さん，同 Dolores Miotto さん，同 Marco Sermonico さん（元），Friuli-Venezia Giulia 自治政府 Marco Stolfo 博士，同 Federica Angeli さん，同 Cinzia Petris さん，ARLeF 所長 Massimo Duca 博士，同所員 Franco Finco 博士，SFF Web 編集部編集長 Feliciano Medeot さん，Radio Onde Furlane 局員の Carli Pup さん等，担当各位には多大な協力を得て成された。いつ訪問しても，最大限のもてなしを惜しまず手をさしのべてくれたことなくして本考察は為し得なかった。このことをあらためて感謝したい。

また，今回の在外研究の萌芽となった'07年度の最初の訪問に際しては，ローマでの古い友人である Paola La Valle さんが橋渡しをしてくださった。彼女の連絡調整・協力無くしては，研究の端緒に付くことすら難しかった。あらためて感謝したい。

---

3 正式名称は，大学本部の置かれている宮殿の名を取って Università di Ca' Foscari Venezia という。「ヴェネツィア大学 Università di Venezia」という名称は，しかしながら，各地で用いられ，聞き慣れない Università di Ca' Foscari Venezia の代わりに広く用いられているため，ここでは，ヴェネツィア大学と呼んでおく。

さらには，２ヶ月半にもわたる在外研究に関しては，ヴェネツィア大学での受け入れ先となってくださったBonaventura Ruperti教授をはじめ，ヴェネツィア大学外国語・外国文学学部東アジア学科の先生方，岐阜大学教育学部国語教育講座はじめ教育学部さらには岐阜大学の教員・事務職員各位に助けられて，つつがなく遂行できた。このことにも感謝のことばを述べたいと思う。

【参考文献】

大澤麻里子・山川和彦・長谷川秀樹 (2005)「第８章　イタリア」渋谷謙次郎編『欧州諸国の言語法　欧州統合と他言語主義』三元社

山本真司 (2005)「フリウリ－特にフリウリ語の文化について」原聖・庄司博史編『講座　世界の先住民族－ファースト・ピープルズの現在－』明石書店

Carrozzo Sandri “Furlan e Iperfurlan (o furlan iperpûr)” www.serling.org/new/pdf/furlan_iperfurlan.pdf

Lutz, Florentin (1982) “La Suisse aux Quatre Langues” Editions Zoe：Genève

Marcato, Gianna & Flavia Ursini (1998) “dialetti veneti - grammatical e storia”, unipress：Padova

Penny Ralph(2000) “Variation and Change in Spanish” Cambridge University Press

Posner, Rebecca (1996) “The Romance languages” Cambridge Language Surveys, Cambridge University Press

Sguerzi, Franco (2006) ‘La scuola’, Federico Vicario (ed.) “Nuova lezioni di lingua e cultura friulana” Societât filoligjiche furlane：Udine

Stolfo, Marco (2007) “Minoranze Linguisitiche / Minorancis Linguistichis” Consorzio Universitario del Friuli/Consorzi Universitari dal Friûl：Udine

Vicario, Federico (2005) “Lezioni di linguistica friulana” Provincia di Udine

Vicario, Federico (ed.)(2006) “Nuove lezioni di lingua e cultura friulana”, Societât Filologjiche Furlane：Udine